

## 室町時代における漢語「父母」の語形

坂 水 貴 司\*

### 1. 本報告の目的

大東急記念文庫蔵『孝経秘抄』は、漢籍である『古文孝経』の抄物（注釈書）である。この文献は清原宣賢（1475-1550）自筆の文献であり、室町時代に成立した抄物である<sup>1)</sup>。この文献の「父母<sup>フボ</sup>」（44ウ8）の例には、「父母 フウボト不讀 プモト・不讀」という注記が付されている。これは「父母という語はフウボと読まない。プモと読まない」という意味の注記である。この注記から、「父母」という語には発音上「ブモ」「フボ」「フウボ」の三形があり、それぞれ区別されたことが知られる。

ではなぜ、「ブモ」「フウボ」と読んではいけないのか。本報告ではこの注記を手がかりとして、次の点を明らかにすることを目的とする。

- ①「フボ」「ブモ」「フウボ」にはどのような使い分けがあるのか。
- ②「父」「母」を組み合わせただけでは生じない語形「フウボ」の成立要因は何か。

### 2. 「ブモト・不讀」と「フウボト不讀」

#### 2.1 「ブモト・不讀」

##### 2.1.1 「ブモ」と読むべきでない理由

まず、なぜ「ブモ」と読むべきでないのかという課題を検討する。結論を先に述べれば、「ブモ」が呉音形であるためである。

語形「ブモ」が呉音形であることは、呉音読

の仏典を調査することで明らかになる。たとえば霊友会蔵『仮名書き法華経』鎌倉中期写本には、「父母<sup>ふも</sup>所生<sup>しよしやう</sup>の・まなこをもて」（1015-5）のような用例が見られる。その他の呉音読仏典でも「ブモ」と読まれることは同様である。

一方『古文孝経』は漢籍である。漢籍で使用される字音系統は漢音であることが知られており（築島裕 1977: 39-40）、清原宣賢は漢籍である『古文孝経』に呉音読の「ブモ」は使用すべきでないと考えて注記を付したと考えられる。

##### 2.1.2 呉音読仏典以外での「ブモ」の使用

日常的な漢語を反映すると考えられる文献での漢字音は呉音・漢音の両者が使用される。

このような文献での「父母」は、大英図書館蔵『天草版平家物語』1592年刊本の“bumo no vō”（父母の恩、45-19）に見られるように、基本的に呉音形「ブモ」が使用されたようである。

一方で、漢籍に準ずる文献でも呉音形「ブモ」が使用されることがあった。漢籍を引用する大英図書館蔵『天草版金句集』1593年刊本には“Bumo fonou couou yaxinate voxiyezaruua”（507-23, 父母養其子而不教）の例が見られ<sup>2)</sup>、日常的な漢語で使用される呉音形「ブモ」が漢籍に入り込むことがあったことが想定される。

『孝経秘抄』の「ブモト・不讀」の注記は、日常的な漢語の形であった「ブモ」が漢籍に入り込まないように注意したものと考えられる。

#### 2.2 「フウボト不讀」

漢籍では次のように漢音形「フボ」が使用さ

\* 広島経済大学教養教育部助教

れるのが原則である。

『孝経秘抄』所載『古文孝経』、清原宣賢自筆、大東急記念文庫蔵

父<sup>フ(清)</sup>-母<sup>ボ(濁)</sup> (28オ3, 62オ4, 62ウ8, 78オ6), 父<sup>フ</sup>-母<sup>ボ</sup> (28ウ3, 44ウ8), 父<sup>フ</sup>-母<sup>ホ</sup> (63ウ4)

『論語鈔』室町期写本、石川武美記念図書館成實堂文庫蔵

父<sup>フ</sup>-母<sup>ホ</sup> (①9ウ3)

一方で、漢籍には「フウボ」も出現する。

建武本『論語』室町期後筆、大東急記念文庫蔵

父<sup>フ(去)</sup>-母<sup>ボ(上)</sup> (①60), 父<sup>フ</sup>-母<sup>ボ</sup> (①121, ②165), 父<sup>フ</sup>-母<sup>ボ</sup> (⑥13), 父<sup>フ</sup>-母<sup>ホ</sup> (⑨102)

『論語鈔』室町期写本、石川武美記念図書館成實堂文庫蔵

父<sup>フ</sup>-母<sup>ホ</sup> (①17オ3, ⑤17オ4), 父<sup>フ</sup>-母<sup>ホ</sup> (③24オ6, ⑤12ウ5, ⑤13オ2)

『雑字類書』(文明本節用集)室町後期写本か、国立国会図書館蔵<sup>3)</sup>

父<sup>フウ[朱]ボ[朱]</sup>-母 (71-8, 197-3, 303-4, 304-1, 322-5, 352-6, 400-5, 400-6, 640-3, 688-8, 688-8, 724-6, 725-4, 896-1, 897-6, 897-7, 1059-7, 1060-2), 父<sup>フウ[朱]ボ</sup>-母<sup>ホ</sup> (640-6, 688-1, 688-3, 688-4, 721-4, 792-4, 968-1), 父<sup>フウ[朱]ホ</sup>-母 (792-5, 795-1)

このように漢籍には「フボ」「フウボ」の両形が出現する。それなのになぜ清原宣賢は「フウボト 不讀」という注を付けたのであろうか。

語形「フウボ」が指摘できるのは室町時代に入ってからである(柳田征司 1993: 152)。この「フウボ」は漢籍に集中して出現するため、漢音形「フボ」に由来する新形と考えられる。

伝統的な読み方を重視する清原家の清原宣賢

にとって、新形「フウボ」は「正式な語形」ではなく、漢籍で使用すべき語形ではないと認識していたと推測される。

### 3. 語形「フウボ」の発生要因

漢音形「フボ」から「フウボ」が発生したのには複数の要因が関わると考えられる。ここでは「言語内的発生要因」「言語外的発生要因」に大別して、想定される発生要因を考える。

#### 3.1 言語内的発生要因

##### 3.1.1 音声学・音韻論的発生要因

まず想定されるのは、発音上の(音声学的・音韻論的)発生要因である。「父母」の「父」の漢音が長く発音されたことを想定する。

「父」は中国語中古音(600年ごろの中国語音)では上声(高平調)であった。「父」の子音は中国語音韻学で「全濁」と呼ばれる有声音であり、後の中国語では去声(上昇調)に変化する(平山久雄 2022: 163)。唐代長安音を借用した日本漢音では、上声(高平調)・去声(上昇調)の両者が使用された。

上昇調は発音に時間を要するため、長く発音されることがある<sup>4)</sup>。「父」の漢音が上昇調で発音されて長く発音されたことが、語形「フウボ」が生じたことの要因の一つに想定される。

しかし漢籍において長形で固定するのは上昇調を有する全ての語ではなく、一部の語に偏る(中田祝夫 1979: 35)。純粋な音変化であれば同条件の語が等しく変化するため、偏りが生じることはない。この偏りを説明するには他の要因を想定せねばならない。

##### 3.1.2 意味論的発生要因

複数の形態素が複合して一語をなすとき、各形態素の意味が薄まることがある。その結果として次のように形態の変化が起こる場合がある。

手水 <sup>手</sup>テ + <sup>水</sup>ウズ → チョーズ (融合)

本報告の「フウボ」も同様に、「父」「母」それぞれの意味が薄まり、「父母」という語として意味を担うようになったのではないか。

呉音形の「ブモ」の例であるものの、「父母」が「父」と「母」ではなく、「親・両親」ととらえられている例がある。

De. *Bumo*, *xujin tçucafa taru fitobito* (054-20)

Xi. *Voya*, *xujin, tçucafa taru fito* (054-23)

この例は東洋文庫蔵『ドチリーナ・キリシタン』のもので、「弟子」(De.)と「師匠」(Xi.)が問答している例である。「弟子」は“*Bumo*”(ブモ)を使用する一方、「師匠」は直後の同一文脈で“*Voya*”(オヤ)を使用する。これは、「父母」という語が「親・両親」という意味をもっているために行われたと考えられる。漢音形「フボ～フウボ」も同様の状況にあったのではないか。

このように意味論的要因を想定すれば、特定の語に偏るといった状況を説明できる。

### 3.2 言語外的発生要因

さらに社会的な認識が形態の変化に影響した可能性がある。長く発音される語形が漢籍らしいと認識されれば、漢籍において長く発音される語形の生産が促されると考える。

本報告で取り上げた「フウボ」と類似した音配列をもつ語として、「フウシ」(夫子)が挙げられる。「夫子」は「フウボト 不讀」という注記のある『孝経秘抄』でも、「夫子」(4オ7, 4ウ1)のように長形で出現する。このように長形が漢籍にすでに存在していたことで、長形が漢籍らしいと認識されることがあったのではないか。「フボ > フウボ」の変化には、より漢籍らしい語形を使用したいという動機があった可能性も検討する必要がある。

## 4. 本報告のまとめ

### 4.1 本報告で述べたこと

本報告では『孝経秘抄』の「ブモト・不讀」「フウボト 不讀」を検証する形で調査を行った。「ブモ」「フボ」「フウボ」は文献で次のような分布で出現していた(表1)。

表1 文献と「父母」の語形の関係

|     | 呉音読仏典 | 日常漢語 | 漢籍 |
|-----|-------|------|----|
| ブモ  | ○     | ○    |    |
| フボ  |       |      | ○  |
| フウボ |       |      | ○  |

○ = 当該語形が出現しやすい文献

これらより、まず「ブモ」は呉音形であるため漢籍では受け入れられなかった一方、「フボ」は漢音形であるため漢籍で受け入れられる形であったことを指摘した。次に、「フウボ」は漢音形「フボ」に由来する新形であったため、清原宣賢は「正式な語形」と認めず、「フウボ」の使用を防ぐような注記を付したことを述べた。

さらに「父」と「母」の単純な組み合わせからは生じない語形である「フウボ」の発生要因について、言語内的要因と言語外的要因に分けて考えた。言語内的要因として、まず「父」が上昇調をもつために長く発音されたことを挙げた(音声学・音韻論的発生要因)。また、「父」と「母」それぞれの意味が薄まり、「父母」という語としての意味を獲得したため、形態の変化が促された可能性を述べた(意味論的発生要因)。言語外的要因としては、「フウボ」という長形が「漢籍らしさ」を感じさせるという認識が持たれていたことを想定した(社会的発生要因)。

以上の諸要因はさらなる検討を要する。対象とする語を増やし、これらの諸要因が想定可能か検証を重ねたい。

## 4.2 室町時代における日本漢字音研究

室町時代の漢字音研究では、漢字音の借用から時間が経っているからこそ生じる変化に着目することができる。たとえば本報告で扱った「父母」の新形「フウボ」は、漢字音の借用から時間が経ったからこそ発生するものと考えられる。

この視点で研究するためには、研究対象とする時代の音体系がある程度明らかになっているという前提が必要である。室町時代は和語の音に関する研究の蓄積と、資料の豊富さから、他の時代に比べて音体系を把握しやすい。

これまでの漢字音研究の成果を引き継ぎつつ、室町時代独自の枠組みを模索したい。

付記：席上ご指導くださった先生方に、心よりお礼申し上げます。本報告は科学研究費補助金「資料横断的な漢字音・漢語音データベースの拡充と運用に向けた基礎的研究」（基盤研究B・研究課題番号：22H00665）の成果の一部である。

### 注

- 1) 日本語史研究の「室町時代」は、政治史的区分におけるそれと範囲がずれることがある。本報告でも「南北朝時代～江戸幕府成立ごろまで」というような広い範囲で「室町時代」という語を用いている。
- 2) 出典は『古文真宝』前集所載「柳屯田勸学文」であることが、山内洋一郎（2007: 138）によって明らかにされている。用例中の漢文本文は星川清孝（1969）によった。
- 3) 『雑字類書』は古辞書であるものの、漢籍の用例を載せることが知られている（中田祝夫 1979: 18）。本報告で取りあげた用例も、すべて『雑字類書』所載の漢籍の例である。
- 4) 平安時代の和語でこの傾向があったことは、金田一春彦（1953: 329-332）に指摘がある。

### 依拠資料

- 『天草版金句集』1593年刊、大英図書館蔵、福島邦道解説（1977）『金句集四種集成 勉誠社文庫18』勉誠社、所在は原本の頁数と行数による
  - 『天草版平家物語』1592年刊、大英図書館蔵、福島邦道解説（1994）『天草版平家物語 大英図書館本影印』勉誠社再版、所在は原本の頁数と行数による
  - 『仮名書き法華経』鎌倉中期写、霊友会蔵、中田祝夫編（1988）『妙一記念館本仮名書き法華経 影印篇下』霊友会、所在は同複製の頁数と行数による
  - 建武本『論語』室町期後筆、大東急記念文庫蔵（22-3-3）、蒲田政治郎編（1939）『建武本論語』蒲田政治郎、所在は巻数・行数による
  - 『孝経秘抄』清原宣賢自筆、大東急記念文庫蔵（22-35-44）、原本調査による。所在は原本の丁数・表裏・行数による
  - 『雑字類書』（文明本節用集）室町後期写本か、国立国会図書館蔵（WA16-21）、「国立国会図書館デジタルコレクション」<https://dl.ndl.go.jp/pid/1286982>（2023年4月27日閲覧）、中田祝夫（1979）『改訂新版 文明本節用集研究並びに索引』勉誠社、所在は同複製本の写真番号・行数による
  - 『ドチリーナ・キリシタン』1592年刊、東洋文庫蔵（PB32）、東洋文庫監修（2014）『東洋文庫善本叢書2 重要文化財 ドチリーナ・キリシタン 天草版』勉誠出版、所在は原本の頁数と行数による
  - 『論語鈔』室町期写本、石川武美記念図書館成賞堂文庫蔵、『論語鈔』（1917年、民友社）、所在は原本の巻数・丁数・表裏・行数による
- ※検索には加藤大鶴ほか「資料横断的な漢字音・漢語音データベース バージョン20230204」<https://www2.mmc.atomi.ac.jp/~katou/KanjionDB/index.html>（2023年4月27日確認）を使用した。

### 参考文献

- 金田一春彦（1953）「国語アクセント史の研究が何に役立つか」金田一博士古稀記念論文集刊行会編『金田一博士古稀記念 言語・民俗論叢』三省堂、pp. 329-354
- 築島 裕（1977）『国語の歴史』東京大学出版会
- 中田祝夫（1979）「文明本節用集のために」『改訂新版 文明本節用集研究並びに索引』勉誠社、pp. 3-49
- 平山久雄（2022）『平山久雄 中古音講義』汲古書院
- 星川清孝（1969）『新釈漢文大系 第2巻 古文真宝 前集（上）』明治書院、1975年の第17版による
- 柳田征司（1993）『室町時代語を通して見た日本語音韻史』武蔵野書院
- 山内洋一郎（2007）『天草本金句集の研究』汲古書院